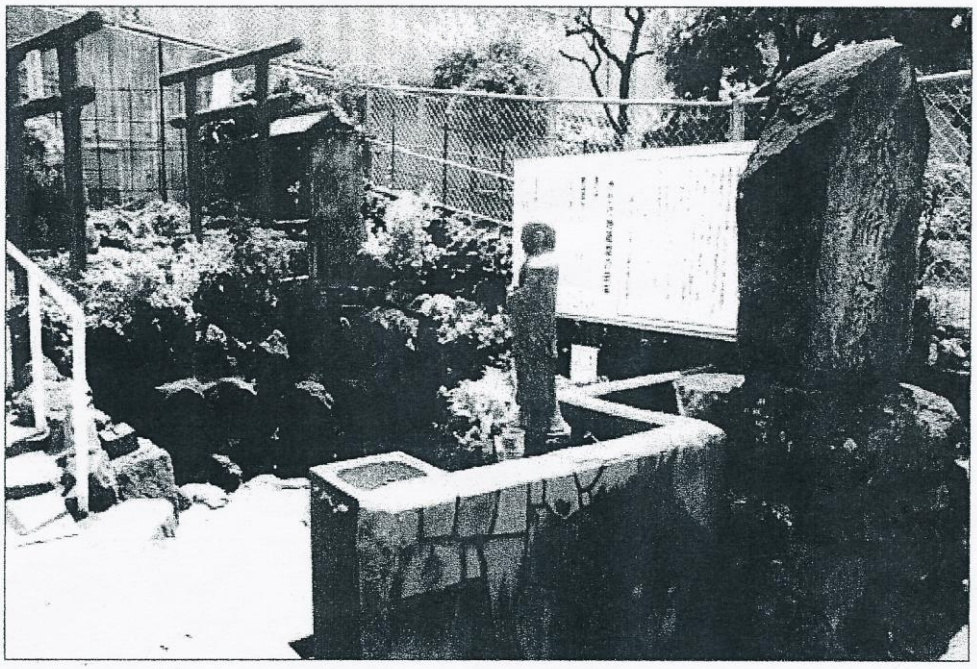
泉台校区　及び
その周辺の史跡

中川正冨

水かけ地蔵尊



九州の要（かなめ）の地である城下町小倉は、長崎街道をはじめ九州の主な街道の起点であり、人や物、情報が行き交う大きな宿場町でもありました。毎年、参勤交代の大名行列やオランダ商館のカピタン行列、長崎奉行たちがここから船で関門海峡を渡り、江戸との往復をしたわけです。このため九州の諸大名たちが宿泊する「本陣」が数十軒もあり、城下は賑わい繁栄しました。長崎街道は江戸時代、小倉－長崎間 57 里（およそ 228km）を 25 か所の宿場で結んでいました。徳川幕府が鎖国体制をしいていたなかで唯一、海外への窓口を開いていた長崎には、海外からの人物・知識・文化が流入するため、長崎街道は貴重な“文明ロード”となっていました。

その旧長崎街道の脇に泉があり、そこに地蔵尊が祀られています。

泉は、この水を**神功皇后（弥生時代）**が飲まれたことから「皇后水」、

また天平 12 年（740 年）**板櫃川の合戦時（奈良時代）**、聖武天皇により守護仏がここに安置されたことから「観音霊水」とも云われています。

さらに、**弘法太師（平安時代初期）**が諸国巡礼のときに、飲まれたことから「弘法の水」と云われています。

このように、この泉は多くの旅人の憩いの水とされていたと云われています。また、地蔵は水かけ地蔵として多くの人々に親しまれています。そして、その脇に長崎街道碑が建立されています。

神功皇后伝承地　（和布刈神社～魚鳥池）

和布刈神社

皇后が三韓征伐からの凱旋を祝って自ら神主となり早鞆瀬戸のワカメを刈って神前に捧げたという古事による。また海部の神安雲の磯良が、神功皇后に潮干珠、潮満珠を献上した故事による。

甲宗八幡神社

860 年、大宰大弐· 清原真人が勅命により、宇佐神宮にあった神功皇后が着用した甲（かぶと）を御神体として、西門鎮護の要である門司港に近い筆立山の麓に祀った。

羽山神社（門司区小森江）

神功皇后の三韓出兵後、高麗からの朝貢船が着く場所として、この付近を高麗入江と称していた。

到津八幡神社

神功皇后が朝鮮出兵より帰還し、宇美で応神天皇を出産された後、長門の豊浦宮に戻られる時、この地の津に到ったことから、到津（いとうづ）の地名が生まれたとのことです。その後、祠を建て皇后の御霊を祀ったのが社の起源といわれています。また、神功皇后が、この前に流れる川の水を汲み産湯に使ったことから、人々は安産を願うようになったと云われています。現在、この川は板櫃川と言われていますが、鳥居付近だけ「産川」と言われていました。

到津八幡常夜灯

嘉永 5 年（1853 年）、企救郡（小倉北区・小倉南区・門司区・八幡東区の一部）の各庄屋が大干ばつ時の雨乞いの御礼のため、灯明田とともに奉納したもので、昭和初期まで菜種油を燃料に火を灯していました。その後昭和 15 年までは、電燈に変わり、第二次大戦にて暫く中止となっていましたが、平成7年、実に 54 年振りに復活しました。

到津八幡反橋

水戸家江戸屋敷内の後楽園の池に架かっていた石橋で、錦春稲荷神社と共に小倉に移されたものです。

到津八幡かっぱ明神

小倉南区の菅生の滝付近に祀られていたもので、水を司る神様として崇敬されています。

勘定稲荷神社

錦春稲荷神社

到津荘

701 年大宝律令が施行されると、全国の道路網が整備され、駅家（うまや）が設けられました。北九州では西より、夜久（やく、八幡西区上津役）－独見（ひとみ、八幡東区前田）－到津（いたむつ、小倉北区到津）－杜碕（もりさき、門司区田野浦）に駅家が設けられ、宿舎や食料を提供し、人馬の継ぎ立てをしました。平安時代から戦国時代にかけては、宇佐神宮の中心的荘園でした。

到津荘の範囲は、北は海岸、南は高槻、現在の八幡東区槻田付近の山で、豊前と筑前の国境付近、東は現在の小倉城のある勝山公園、西は豊前と筑前の国境の、現在の小倉北区と戸畑区の境の、境川となります。

このような広い範囲を、宇佐神宮は農民を組織し、灌漑施設を設けて農地を開発し、やがて荘園領主と在地領主の性格を持つようになっていきました。後、到津八幡神社は到津荘の鎮守として宇佐八幡宮から勧請されました。

篠崎八幡神社

神功皇后が三韓を攻め、凱旋して筑前国宇美で皇子（後の応神天皇）をお産みになった。翌年、穴門（長門）の豊浦宮に向かう途中、鷹尾（高尾）山にさしかかると、山頂の大石に皇子をたたせ、遥かに長浜や文字ヶ関（門司）から穴門の方を望み、「穴門は近し」といわれたという。

敏達天皇十二年（584 年）に勅命によって、この故事に基づき鷹尾（高尾）山の麓の朝倉谷に、仲哀天皇、神功皇后、応神天皇を祀り、葛城小藤丸を住まわせて祭祀に当たらせ『篠崎神社』とした。天平二年（730 年）宇佐八幡宮から分霊を勧請し、『篠崎八幡神社』とした。

天平十二年（740 年）

太宰少弐藤原広嗣の反乱において、官軍は豊前国板櫃川の東に陣を敷き、大将軍大野東人は篠崎八幡神社にて戦勝を祈願し、みごと、賊軍を破ることができた。

仲宿八幡神社

神功皇后が、この地で中宿りし、豊山の宮を造営した事によると云われている。

豊山八幡神社

神宮皇后、三韓征伐の帰路この地に立ち寄り、弓矢を山中に納め、天下が豊かになることを祈り、この山を豊山と名付けた。その故事にもとずき、光孝天皇の時代(884～887年)に神社が創建された。

乳山(ちやま)八幡神社

神功皇后が、この地で皇子(応神天皇)に乳を与えた事によると云われている。

勝田神社

神功皇后が、この大蔵谷から、御旗竿の竹を伐りだしたことから勝山と名づけ、社を祀ったといわれています。また、黒田藩主も代々この地から旗竿を取っていました。

皇后杉

権現山から皿倉山山頂付近の樹齢150年から200年に達する老杉を総称して、皇后杉といいます。これは、神功皇后が新羅渡航のおり、軍船の帆柱をこの地から伐り出したという言伝えによります。

国見岩

神功皇后が、この岩の上に立ち新羅までの航路を決めたとされて云われています。

若松恵比寿神社

仲哀天皇が、神功皇后とこの地に入った時、武内宿禰が洞海の海底を漁師に調べさせたところ、光輝く石を抱いて上がってきたので、天皇はその霊石を手にとって「これは事代主神が、我が船旅を守り給う御心のしるしならん」と喜んだので、武内宿禰が近くの浜辺に祠を建ててまつったのが鎮座の由来となっています。

貴船神社

神功皇后が新羅渡航のおり、洞海を通りしとき船がなかなか進まず、貴船の神を祭り、その時お手植えした松が、この船留の松と云われ、現在は枯れてしまった為石碑のみがあります。

この貴船神社で、ご神体のほら貝からお神酒をいただき、不老長寿を祈願する「ほら貝祭り」が行われています。

魚鳥池(ぎょちょうがいけ)

仲哀天皇が熊襲征伐のため、神功皇后と共に筑紫の崗(おか)の水門(みなと)[現在の芦屋町]に向かった時、皇后は別の船で洞の海(洞海湾)に入ったが、払川の鵜の巣付近で干潮となり船が進まなくなりました。案内役の崗県主熊鰐(おかのあがたぬしくまわに)は、恐れ入ってすぐさま池をつくり、魚や水鳥を集めて皇后をお慰めしたと云われ、後にこの池を魚鳥池と呼び、石を組んで井戸にしました。この井戸は、どんな日照りでも枯れず、おいしい水であったため、人々は飲料水としました。また、江戸時代には、この水で酒が造られ、非常に味が良く遠賀郡第一と言われています。

近くに、皇后お腰掛の松があった魚鳥池神社があります。

板櫃川の戦い　740年　(板櫃川にまつわる話)

【所在地】 八幡東区川渕町

今から 1,200 年ほど前の天平時代に、奈良の都に藤原広嗣という若者がいました。広嗣の父やおじ達は天皇に仕える高官でしたが、その頃流行った天然痘のため次々に亡くなりました。残された広嗣は、父やおじ達の官位を継げるものと思っていましたが、反対派が権力を握ったため、遠く太宰府の役人に追いやられました。そこで、広嗣は天皇に直訴しましたが取り上げてもらえません。不満がつのった広嗣は、1万人の兵士を集め都を目指しました。これに驚いた天皇は 1 万7千人の軍隊を九州に派遣しました。両軍は板櫃川(小倉北区)で衝突し、激戦となりましたが、広嗣軍は負けてしまいました。広嗣は天皇方に捕らえられて、肥前国松浦郡で首をはねられました。それから6年程ののち、太宰府に観世音寺を建立するため、都から広嗣が恨んでいた一人の玄昉という僧が来ました。

お寺が建って落成式の最中に、天候が急変し強風が吹き付けて来ました。そして、その雲の中から大きな手が出てきて、玄昉の首を引きちぎってしまいました。その首は空高く飛び、遠く奈良の興福寺の庭に落ちました。ここには、今もこの首を祀った頭塔があります。板櫃川付近の人々は、戦に破れた広嗣を可愛想に思い、小さな祠を建てて魂を慰めました。

今は荒生田神社(八幡東区川渕町)に祀られています。

弘法大師の伝説

各地に残る「弘法大師」伝説は「空海」個人のとった足跡とは必ずしも一致しない。弘法大師に関する伝説は、北海道を除く日本各地に 5,000 以上あるといわれ、歴史上の空海の足跡をはるかに越えている。柳田國男は大子(オオゴ、神の長男を意味)伝説が大師伝説に転化したという説を提出しているが、ほかに中世、日本全国を勧進して廻った遊行僧である高野聖の存在もある。ただ、闇雲に多くの事象と弘法大師が結び付けられたわけではなく、やはり空海の幅広い分野での活躍、そして空海への尊崇がその伝説形成の底辺にあると考えられる。
弘法大師にまつわる伝説は寺院の建立や仏像などの彫刻、あるいは聖水、岩石、動植物など多岐にわたるが、特に弘法水に関する伝説は日本各地に残っている。弘法大師が杖をつくと泉が湧き井戸や池となった、といった弘法水の伝承をもつ場所は日本全国で千数百件にのぼるといわれている。鎌倉 - 江戸時代の学者などにより、空海は本朝における男色の開祖とされることもある。徳川時代の川柳や笑話などにも、しばしば衆道を唐土から導入した人物として登場する。

発見したとされる温泉

弘法大師が発見したとされる温泉は、日本各地に存在する。

芦ノ牧温泉(福島)　　修善寺温泉(静岡)
東道後温泉(愛媛)　　まむし温泉(福岡)
杖立温泉(熊本)　　熊の川温泉(佐賀)
波佐見温泉(長崎)

伝説・伝承

弘法大師が由来とされる伝説や伝承があるもの。

平仮名　いろは歌　灸　讃岐うどん
手こね寿司　九条葱
エツ - 日本では筑後川のみに生息する魚、絶滅危惧種
曜日　水銀鉱脈の発見

ことわざ・慣用句

弘法も筆の誤り

空海は天皇からの勅命を得、大内裏応天門の額を書くことになったが、「応」の一番上の点を書き忘れてしまった。空海は掲げられた額を降ろさずに筆を投げつけて書き直したといわれている。現在残っているこのことわざの意味は「たとえ大人物であっても、誰にでも間違いはあるもの」ということだけであるが、本来は「さすが大師、書き直し方さえも常人とは違う」というほめ言葉の意味も含まれている。

弘法筆を選ばず

文字を書くのが上手な人間は、筆の良し悪しを問わないということ。ただし、性霊集には、よい筆を使うことができなかったので、うまく書けなかった、という、全く逆の意味の言及がある。「弘法筆を選ぶ」として、逆の意味のことわざとして用いられることもある。

護摩の灰

弘法大師が焚いた護摩の灰と称する灰を、ご利益があるといって売りつける、旅の詐欺師をいう。後に転じて旅人の懐を狙う盗人全般を指すようになった。

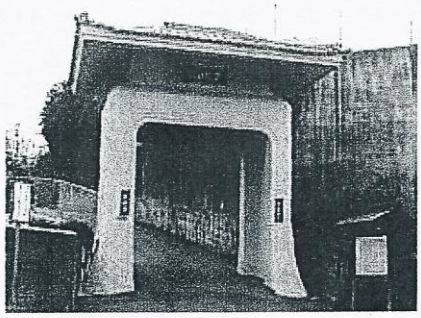
生麦大豆二升五合(なまむぎだいずにしょうごんごう)

民間に伝わる呪文で、これを唱えれば難事を避けることができるという。本来の字義からは離れてしまっているが、空海の御宝号「南無大師遍照金剛(なむだいしへんじょうこんごう)」が転訛したもの。

満隆寺　(門司区大里・戸上神社境内)

平城天皇の大同元年(806 年)、遣唐使から帰朝中の空海が、戸ノ上山に霊感を感じたため上陸し密法を修行され山麓に一宇を建立し、満隆寺と号したと云われています。その後戦国時代に大友氏の兵によって僧坊等悉く灰燼に帰しましたが、江戸時代に復興しました。しかし、明治時代の神仏分離令により廃寺となりました。

大満寺

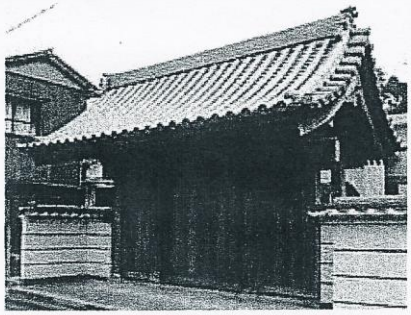


曹洞宗

本尊　十一面観音(塩買観音)

由緒　天正年間(1580 年頃)、企救郡古川村(現在の小倉南区徳吉)に創建されましたが、元和年間(1620 年頃)火災に遭い小倉城内魚町へ移転しました。そして、昭和 28 年現在地へ再度移転しました。本尊は、かつては住職一代に一度の御開帳という秘仏で、行基の作とも云われ天正年間に火災にも本尊のみが焼け残ったと云われています。また、本尊は、「塩買観音」とも言われています。ある年、雪が連日降り積もるなか、塩が無くなり調理が出来ないでいると、商人が塩を担いできました。寺では、不思議に思い、商人に尋ねると、昨日僧が来て「小倉城下の大満寺の僧だが、明日、塩がいるので届けてほしい。」といって代金を置いていったと言う。このことから、ご本尊が行ってくれたのだろうということで、塩買観音と呼ぶようになったそうです。

法輪寺



浄土真宗本願寺派

由緒　開基の仙学は、永照寺 2 代了信の嫡男でしたが、故あって永照寺を継がず永禄年間(1558～1570 年)に、この寺を起こしたと云われています。慶長 12 年(1607 年)7 月、2 代専教のとき本願寺から長福寺の寺号を許可されました。享保元年(1716 年)、8 代将軍吉宗の子が長福と名付けられたので、藩主の命によって寺名を法輪寺と改めました。昭和 26 年、米町 1 丁目 2 番から現在地へ移転しました。

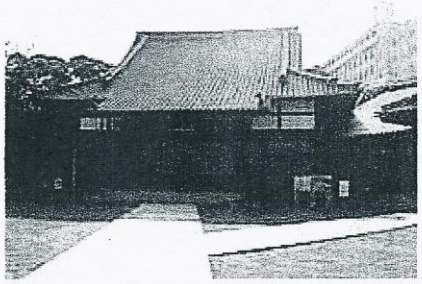
本就寺

日蓮宗

由緒　天正年間(1580 年頃)には、既に紫川の西岸(現在のリバーウォークの場所)にありました。そして天正 15 年(1587 年)毛利勝信が小倉城主になった時、この寺を菩提寺としました。その後、小倉城主となった細川忠興は、慶長 7 年(1602 年)小倉城の二の丸を建設するにあたり、この寺を米町へ移転させました。昭和 19 年、戦時中の強制疎開により現在地へ移転しました。

寺には、豊臣秀吉が食事をしたという「太閤膳」と、秀吉の東帯姿の画像が大切に保管されています。秀吉は、文禄元年(1592 年)、関門海峡を航行中に座礁、難を逃れた秀吉は小倉に上陸しこの「太閤膳」で食事をしたので、それを拝領したと云われています。

円応寺



真宗大谷派

由緒　天正 12 年(1584 年)、豊前国仲津圓應寺に住んでいた開基真誉見道上人は、小倉に来て小倉圓應寺を建立した。かつては、広大な境内を持つ大寺で、寺の前の通りは「円応寺筋」と呼ばれていました。昭和 28 年、堺町 1 丁目 1 番から現在地へ移転しました。

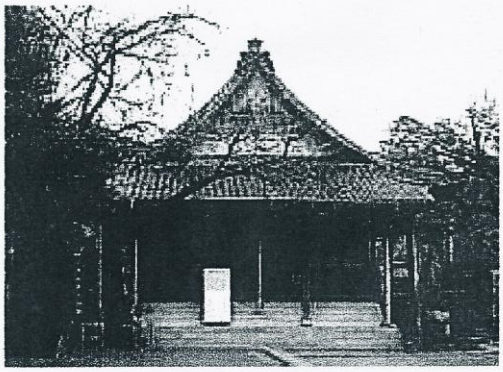
香月牛山の墓

香月牛山は、小倉藩きっての名医で、出身は筑前国香月、名は則真、「牛山」はその号です。小さい時は筑前国の貝原益軒に儒学と博物学を学び、成長してからは鶴原玄益に医学を学びました。初めは、中津藩に14年間程仕え、その後京都に 17 年間遊学しました。その間、多くの医者が治せなかった大覚親王(霊元天皇の第九皇子)をの病気を治して一躍有名になりました。このことを聞いた小倉藩主忠雄は侍医として招へいしました。牛山は、医業に励むかたわら「夫人寿草」「小児必要記」等数多くの医学書を執筆し。元文 5 年(1740 年)85 歳の高齢で亡くなりました。なお、出身地の香月吉祥寺には、寿塔と埋骨墓があります。

故陸軍大尉香月則久の墓

満州国とソ連・外蒙との間の国境紛争で、最大のものとなったノモンハン事件は、日本陸軍が経験した初めて本格的な近代戦で、昭和14年5月に始まった。この、戦闘で戦死した八幡東区大蔵出身の香月大尉の墓が、あります。

清水寺



新真言宗

由緒　創立は、大宝 3 年(703 年)で聖武天皇の勅願所として、豊前国企救の御堂と呼ばれていました。当初は、現在地からから南の高所にあったと伝えています。慶長 7 年(1602 年)小倉城の築城に際し、藩主細川忠興は、城の裏鬼門に当たる現在地に、寺院を建立し本尊観世音菩薩(千手観音菩薩)を移しました。また、藩の祈祷寺として寺禄 150 石を賜りました。寛永 9 年(1632 年)入国した小笠原忠真も深く帰依し、本堂、弁才天堂等 7 堂を新築し祈願所としました。慶応 2 年(1866 年)長州との戦い以後廃頽しましたが、明治 45 年本堂が再建されました。

石垣

慶長 7 年(1602 年)藩主細川忠興が小倉城築城に用意した石の一部を使って築いたと云われています。まさに、雰囲気は城そのものです。

弁才天

山麓脇にある池の中に、弁才天が祀られています。手前の鳥居には寛政五歳(1793 年)と刻まれています。

旅賓の墓

杉田久女の門下橋本多佳子の夫豊次郎が亡き母追善の為、大正 12 年、施主「某」と名を伏せ行路病死者の霊を合祀し建立したものです。

方円斎直守一の碑

武芸十六流の奥義を究め、天明2年(1782年)方円流を創始し、天保 14 年(1843 年)に亡くなりました。天保 15 年、門弟によって、この碑が建立されました。

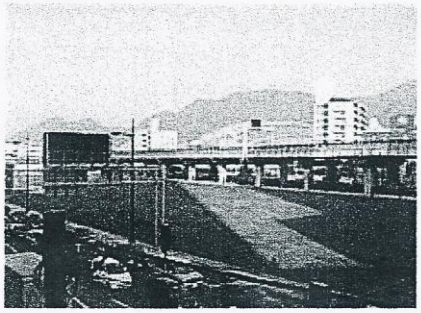
最中庵我山句碑

小笠原藩士鎌田兵大夫の長男として、江戸屋敷で生まれた六左衛門は、医術で藩に仕えていました。文藻舎春猪(芭蕉の 4 代目の弟子)門家の俳人でした。「こけさふなあぶない石の涼かな」

法華石書塔

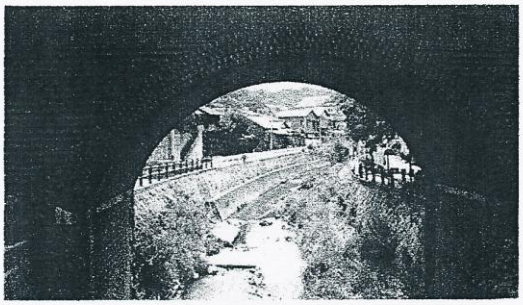
楢原秀近は、和歌、漢書に秀で書は棠陰(とういん)と号していました。文化 8 年(1811 年)対馬に朝鮮使節来朝の折、幕府の正使小笠原忠固の命で、接待役にあたりました。この塔は、門人によって建立されました。

小倉裏線と足立停車場



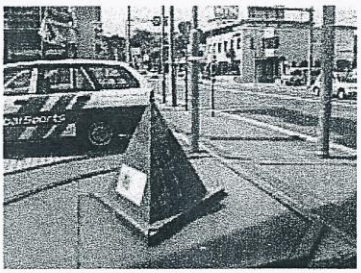
明治 24 年開業した九州鉄道は、現在の鹿児島本線とほぼ同じ経路で、当時は海岸線に沿っていたため、明治政府より艦隊攻撃を受けやすいことを理由に、小倉市街地の南側に路線変更するよう求められていました。このため、明治 36 年旧東小倉駅付近から三萩野交差点を通り、紫川を渡り、南小倉駅までを開通し、日露戦争が始まった 2 日後の翌 37 年 2 月 12 日には、九州歯科大学辺りを通り、後の大蔵線に接続し小倉裏線は全線開通となりました。また、この路線の駅として、中間地点に当たる三萩野交差点付近に「足立停車場」が設置されました。なお、この停車場は、政府からの要望により、駅地 35,000 坪、駅前広場 180 坪など小倉停車場をはるかにうわまわる規模で、現在もその広大な敷地からその大きさが伺えます。しかし、大蔵線が明治 44 年廃止になったため、順次路線は部分廃止され、大正 5 年には全線廃線になりました。なお、全線開業日の翌日、日露戦争に出征する小倉城内の 12 師団は、本線の小倉停車場より規模の大きかったこの停車場から長崎へ出征することとなり、本線及び豊州線の各列車は総て足立停車場からの乗降となりました。しかし、兵員輸送が一段落した 2 月 19 日、一般乗客の乗降は行わないようになり、その後、もう二度と賑わうこともなく足立停車場はひっそりと姿を消しました。

茶屋町橋梁



明治 22 年に九州鉄道株式会社(明治 40 年に国有化)が九州では初めての鉄道を開通させました。その九州鉄道に明治 24 年から 20 年間だけ、北九州市の内陸部を通る大蔵線という区間がありました。大蔵線は明治 44 年に廃線になってから 80 年も経っていますが、その遺構がまだ残っています。その中の一つがこの茶屋町橋梁。マンションや住宅が建ち並ぶ周辺は整地されているので築堤も残っておらず、この橋だけが両側をバッサリと切られポツンと川に架かっています。外観の特徴はなんと言っても「下駄っ歯」と呼ばれる側壁の凹凸。将来的に複線化する場合、この凹凸部分に煉瓦を継ぎ足すことによって強度を確保するそうです。　北九州市の市指定史跡

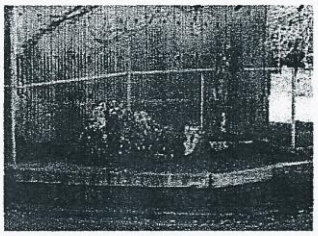
小倉到津球場跡



大正 12 年(1923 年)、現在の上到津3丁目に小倉到津球場が開設されました。当時は、九州野球のメッカとして、製門戦等が行われるなどして、ここから数多くのプロ選手が生まれました。そして、昭和 9 年 11 月 26 日、日米親善試合が行われ、初めて大リーグ選抜チームとして日本を訪れたベーブルースは、7 回裏右翼観覧席に予告ホームランを打ち、ファンを大いに魅了しました。

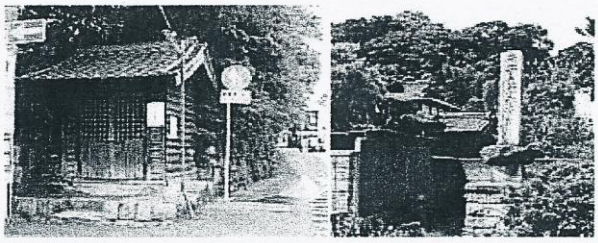
球場の規模　右翼　125m　　左翼　　85m

庚申供養塔



板櫃川のほとりに、寛政 7 年(1795 年)に建造された庚申供養塔が、現在も大切に祀られています。

到津地蔵堂と孝子碑



二市一郡新四国霊場の第 3 番前札所となっている御堂で、本尊は地蔵菩薩です。たたずまいは、まるで江戸時代にタイムスリップしたかのように背景の木々とマッチしています。なお、由緒や云われは、不詳です。そして、道路を挟んで孝子弥吉翁碑があります。

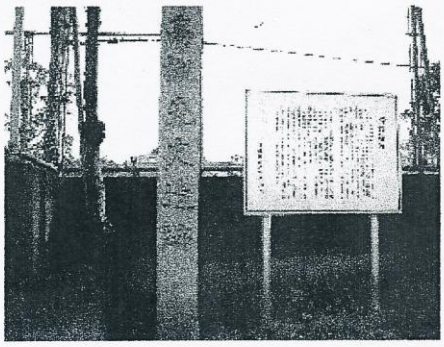
弥生時代の稲作

紀元前 3 世紀から紀元 3 世紀の期間を弥生時代と呼び、土器の形態から前期・中期・後期に区分されます。従来の狩猟・漁労・採集に稲作が加わりました。縄文時代以来、朝鮮半島・済州島・対馬・壱岐・北部九州・瀬戸内海などの地域を結ぶ海人の交流が文化の伝播を支えていました。

水巻町の立屋敷遺跡　　遠賀川

遠賀平野での稲作適地は、遠賀川が土砂を運び形成した沖積土三角州の周辺地域でした。洞海湾に面した河川に形成された沖積地なども稲作適地でした。遠賀川流域の立屋敷（水巻町）から出土した弥生前期の土器は遠賀式土器と呼ばれ、紀元前 2 世紀には南は薩南諸島の一部、東は伊勢湾沿岸と丹後半島を結ぶ線まで広がっていました。

川の土砂が堆積する泥質の沖積地は稲作の適地でした。米は道具との交換が可能でした。それは財産として価値を持ちました。集落間での格差が広がり、水田をめぐって争い、あるときは助け合って灌漑工事を完成させました。いくつもの集落を有力な集落が支配し、その首長は農事や灌漑工事、祭祀を行い、時には戦って一定地域を支配するようになりました。このようにして、弥生時代は身分差が生じるようになります。



八幡東区松尾町の高槻遺跡石碑

遠賀川式土器と同じように弥生前期の土器の高槻式土器が出土した高槻遺跡群（八幡東区）では、石斧とその未完成品が発見されました。近くの山にある石材を原料にして製作されています。これはもっぱら集落内で使うことを目的に作られましたが、周辺各地に分布していますので、交易で流通していったと思われます。前述しましたように、稲作だけではまだ食料は不十分でした。小倉南区の長野小西田遺跡では、ドングリを水にさらしてあくを抜いた 30m 以上もの水さらし場遺構が発掘されています。

2 世紀末、倭国は大きく乱れます。長期間戦いが続きました。この時代の集落は溝や濠によって囲まれた環濠集落が多く見られるようになります。倭の首長達は男王を立てていましたが、大乱が起こりましたので、鬼道に仕える卑弥呼を邪馬台国の女王に立てることによって大乱はおさまりました。卑弥呼がシャーマン的性格を持っていたことが分ります。

邪馬台国の位置については、畿内説と九州説があり、その中でも諸説があります。邪馬台国に到る道程の中で、現在はっきり分る国は、末盧国（肥前松浦郡）、伊都国（筑前怡土郡）、奴国（筑前那珂郡）が九州にあったことが分ります。邪馬台国に属していたのはこの 3 国を含めて 20 余国ありました。北部九州は邪馬台国の勢力内にあったと思われます。

卑弥呼は首長たちによって共立されましたが、相当な軍事力を持っており、女王を助ける男王がいて、独自の判断で政治を行っていたと思われます。邪馬台国の官制は整えられていて、支配する諸国に対し統制の方策が採られていて、官が派遣されていました。倭国では、法を犯すと罰せられ、身分の上下が守られ、税があって、それを収める倉庫があり、市が立って交易が行われました。

魏が公孫氏を滅ぼした翌年の 239 年、卑弥呼は魏に使いを出します。これに対し、魏は卑弥呼に「親魏倭王」の称号と金印紫綬を授けます。243 年にも卑弥呼は魏に使いを出しています。

井手浦（小倉南区）の地名由来

素盞嗚命（すさのうのみこと）の八俣の大蛇退治に村人が射手として加わり、射手裏と称したと伝えられています

天疫神社～祭神:須佐之男命（すさのおのみこと）大穴牟遅命（おほなむち）少彦名命（すくなひこなのかみ）。

北九州の昔話～紫川の上流の山の掟では、ほかの村の者が山に入ると殺されると、伝えられている。

神武東征（じんむとうせい）

舟軍で出発したので現高千穂峰ではない。南九州を出発すると豊後海峡より流れの速い関門海峡を二度通ることになり、不自然である。　寄港地の岡の水門（港）は九州北部の遠賀とされる。芦屋・神武天皇社。黒崎・岡田神社。　東征して大和に到るのは北九州しか有り得ない。　南九州では四国の南に出る、経路が瀬戸内海の北側である。　南九州は熊襲の本拠地であり、神武東征の時には制圧できていない。

帝踏石（ていとうせき）　（小倉南区朽網）

12代**景行（けいこう）天皇**が、土蜘蛛討伐の時、この岩の上で戦勝祈願されたので帝踏石と言われるようになったと言い伝えられている。なお、土蜘蛛とは天皇側に従属していなかった部族の蔑称。

景行 12 年熊襲が背いたので、これを征伐すべく、8 月に天皇自ら西下。豊前国京都郡（福岡県行橋市）に行宮（かりみや）を設ける。豊後国（大分県大分市）で土蜘蛛を誅して、11 月ようやく日向国に入る。熊襲梟帥（くまそたける）をその娘に殺させ、翌年夏に熊襲平定を遂げた。日向（宮崎県西都市）に留まること 6 年。18 年 3 月に都へ向け出立し、熊県（熊本県球磨郡）や葦北（同葦北郡）・高来県（長崎県諫早市）・阿蘇国（熊本県阿蘇郡）・的邑（いくはのむら、福岡県浮羽郡）を巡り、19 年 9 月に還御した。

日本武尊

27 年 8 月、熊襲が再叛。10 月に日本武尊を遣わして、熊襲を征討させる。首長の川上梟帥を謀殺した。

仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）

皇居～穴門豊浦宮（あなとのとようらのみや、山口県下関市長府忌宮神社）

応神天皇（おうじんてんのう）東遷

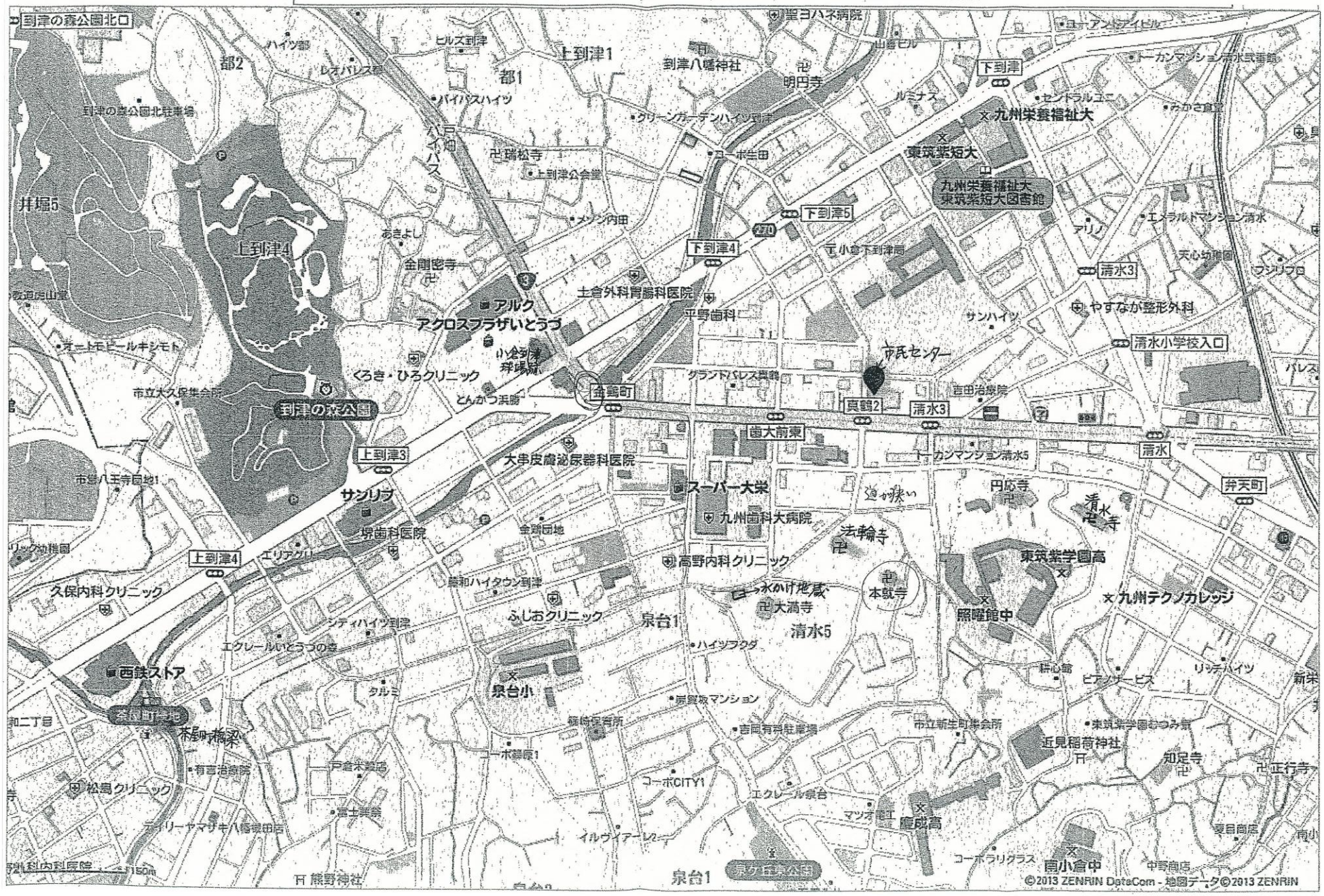
実在性が濃厚な最古の天皇。邪馬台国東遷説にまつわり皇室の先祖として祭られている神（宇佐八幡）とする説。

イスラエルの失われた 10 支族の異説

日本書紀の神武東征によれば、神武天皇（西暦紀元前 711 年 2 月 13 日）誕生と推定）は、西国の日向から東征し、数多の苦闘の末に大和・橿原の地に到達して、西暦紀元前 660 年 2 月 11 日に即位し、初代天皇の神武天皇となったとされる。この神話は、日本人の始祖が日本列島よりも遥か西の地から出た民族であること、事情により故郷を離れ、安住の地を目指して東方へ移動していって日本に到達したことを暗示する。イスラエル王国がアッシリアに滅ぼされ、祖国を追われてどこかに消えたのが西暦紀元前 721 年。これらにより、神武天皇＝失われたイスラエル 10 支族を意味し、東征神話＝イスラエルから日本へ達した彼らの旅路を示すという説もある。

日本の皇室の紋章である「菊の紋」が、古代イスラエル神殿の壁にも残っている。　伊勢神宮の灯籠には、ユダヤ人の印である「ダビデの星」が刻まれている。　日本の神社には、入口の両側に獅子の像がある。古代イスラエルでは、神殿や王宮の装飾に、獅子の像が使われていた。　日本の神社は、釘を使わないで造られる。同様に古代イスラエルの神殿も、一本の釘も使われずに造られていた。　日本の神社の神官が着る白い服も、古代イスラエル神殿の祭司が着ていたものによく似ている。　山伏は、額に「兜巾」（ときん）と呼ばれる黒いものをつける。これは古代イスラエルの祭司が額につけた黒い聖なる箱「ヒラクティリー」にそっくり。　「ひい、ふう、みい、よお、いつ、むう…」は、ヘブル語。　A.D.4世紀頃「秦氏」と呼ばれる種族が、大集団で日本に移住した。彼らは初めて日本に絹の織物を紹介した。当時シルクロードでは、絹の取引はほぼユダヤ人に独占されていたので、彼らはユダヤ人だったとも言われている。

泉台校区周辺史跡マップ



年表

時代	年代	天皇	豪族	出来事	中国・朝鮮半島
縄文	前10000				前2000～前771　夏、殷、周王朝
弥生	前800			前721　イスラエル一氏族日本に渡来？	インド・ヨーロッパ語族の大移動
		神武		前600　日本建国　？	
				前300　九州北部に稲作と金属器が到来	前334　越、楚に敗れ日本に渡来
				前219　秦の徐福、童男女3000人渡来	前221　秦の中国統一
				239　倭の女王卑弥呼、帯方郡に遣使	前202　漢の中国統一
				（魏から親魏倭王の金印と銅鏡100枚）	
	～300	応神		201～269　神功皇后三韓征伐	220　魏の中国統一
古墳	301	仁徳	葛城	538　仏教伝来	346　百済の建国
	～600			500後半　日明一本松塚古墳	356　新羅の建国
			大伴	571～592～725　宇佐神宮	391　高句麗の建国
		継体	物部	573？～1188　到津八幡神社	589　隋が中国を統一
飛鳥	601	推古	蘇我	630　第1回遣唐使	618　唐が中国を統一
奈良		天智	藤原	701　大宝律令施行、全国に道路網	
		天武		720　日本書紀　737　藤原不比等の四子死去	
		文武		740　藤原広嗣の乱に隼人動員	
	～796	元正	～	769　道鏡、和気清麻呂を大隈に配流	
平安	797	恒武		806　空海帰国して真言宗を伝える	961　宋が中国を統一
			藤原	901　菅原道真、大宰府に流さる	1127　元が中国を統一
	～1184			1167　平清盛　太政大臣となる	
鎌倉	1185	後鳥羽		1185　壇ノ浦の戦、平氏滅亡	
	～1331			1192　源頼朝、征夷大将軍となる	
南北朝	1332			1338　足利尊氏、征夷大将軍となる	1368　明が中国を統一
室町	～1491			1404　足利義満、明と勘合貿易	
戦国	1492	土御門			
	～1602			1600　関ヶ原の戦い	
江戸	1603	後陽成		1603　徳川家康征夷大将軍、江戸幕府成立	1664　清が中国を統一
	～1867			1609　島津氏琉球征伐、島津領とする	
明治	1868	明治		1868　戊辰戦争終結、明治となる	
大正	～1925	大正		1872　東京・横浜間に鉄道開通	1912　中華民国が中国を統一
				1894　日清戦争　1904　日露戦争	
				1910　日韓併合	
現代	1926～	昭和		1941　太平洋戦争　1945　太平洋戦争終結	1949　中華人民共和国
		今上			